

# 現代日本語の数詞の形態について

成田 徹男

キーワード：数詞、助数詞、促音化、漢語、和語、外来語

## 0. はじめに

数の概念そのものは普遍的である。そして、文字表記でも、数は、算用数字（アラビア数字）で書かれればほぼ世界共通に理解される。しかし、一方では数を表す語は、基礎語とみなす学者もあることからわかるように、各言語でその（音声）形態が大いに異なり、しかも古くからそれぞれ使用されてきているようである。

ところで、例えば、「八千」は「はちせん」か「はっせん」か、「一杯」は「いちはい」と読むか「いっぱい」と読むか、と聞かれれば、日本語を母語とする人は即座に「はっせん」「いっぱい」と答えるであろう。しかし、日本語を第二言語として学習し始めた人にとって、これは決してやさしくはない。さらに、その学習者が、

「最初に数詞の読みとして『一』は『いち』、『八』は『はち』と習ったのに、そして例えば『八万』は『はちまん』、『六千』は『ろくせん』、『一年』は『いちねん』なのに、どうしてそれらと違う発音になることがあるのか。」

「『一はい（杯）』がどうして『ぱい』という音に変わるのか。」

と疑問を持ったときに、どこまで、どのように説明できるだろうか。

また、「四本」は《しほん》か《よんほん》か、「1チーム6名で3チームまで」というような場合の「1チーム」は《ひとちむ》か《いちちむ》か《いっちむ》か、のような例になると、日本語を母語とする人でも語形の判定にゆれがあったり、どれでもよいと言わざるを得なかったりする。

このように、例えば日本語学習において数をあらわすことばが意外にやっかいなのは、日本語では、数をあらわすことばに、次のようなふたつの大きな特徴があるからである。

- (1) いくつかの系列の数詞が併存していること。
- (2) 音声形態が文字表記に反映していないこと。

日本語では、中国から伝わった漢語の数詞が早くから使われ、日常語として定着しているが、それ以前からあった和語の数詞も一部分に使われ続けており、さらに外来語（特に英語由来）の数詞も使われ始めている。また、日本語の表記のあり方は、漢字仮名交じりが標準であって、数については漢字ないし算用数字で表記されることが多いため、文字から音声形態がつかみにくいのである。<sup>※(1)</sup>

本稿では、現代の日本語のいわゆる共通語における、数詞の形態のパリエーションをできるだけ

け詳しく記述し、より一般的ないし標準的な形態を認定することを目的とする。内容は、本来、日本語学習者向けの辞書に記載するようなことがらである。<sup>26)</sup> しかしながら、現状では、数詞形態全体についての包括的な記述は、きちんとなされているとは言い難い。

よりどころとするのは、主として筆者の観察と内省とである。どの形態が一般的か、あるいは標準的か、という判断は、あくまで主観的なものである。

以下の記述において、音声形態を示す必要がある場合には、簡易的な音韻表示としてひらがな（長音は長音符号を用いた）で表示する。本文中で言及するときは《 》でくくって区別できるようにした。語の通常の表記形態は「 」で示し、必要に応じて漢字表記と現代仮名遣いのひらがな表記を併記する。また、同一の語に複数の形態が併存している場合、より一般的ないし標準的と思われるものを先に示すようにした。

## 1. 数詞の基本形態

日本語では、数をあらわす語の発音に複数の形態があり、音環境や接辞による変異も多いので注意が必要である。数詞の系列は、もっともよく使われる漢語系列の他に、和語系列と、外来語（英語由来が主）系列とがある。

### 1. 1 漢語系列

一般的に使われるのは、次に10までの発音を示す漢語（主として呉音）の数詞の系列である。

#### 【漢語数詞系列】

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
いち	に	さん	し	ご	ろく	しち	はち	きゅう	じゅう
									く

11以上では、基本的に主として漢語数詞系列の語形を使用する。漢語系列では、次に示すように、十進法による規則的な語形を使うので、非常に覚えやすい。

38 (さん + じゅう) + はち  
 十の位の数 位の名称 一の位の数

この中の、「位の数+位の名称」という複合形態形成の規則は、何桁の数になっても、基本的に変わらない。

さらに、大きな数をあらわすものとしては、次のようなものがある。「兆ちょう」の上にも「京けい」などがあるが、日常ではこれ以上の位名称はふつう使わない。

算用数字	100	1,000	10,000	100,000,000	1,000,000,000,000
音声形態	ひゃく	せん	(いち)まん	(いち)おく	(いっ)ちよう
漢字表記	百	千	万	億	兆

数が大きくなったときの、複合形態形成規則は、おおよそ次のようになる。

【漢語数詞系列の複合形態形成規則】

1. 下から4桁ごとに区切って、区切りとなる位に特別の名称がある（下から一つ目の区切りとなる位は「万まん」、二つ目は「億おく」、三つ目は「兆ちよう」などなど）。ただし、万未満の4桁については、区切りの位名称がない。
2. それぞれの区切りまでの数の後に、区切りの位名称を言う。
3. 区切りの中は、上から「千せん」「百ひゃく」「十じゅう」「一いち」という名称の位がある。
4. 区切りの中では、それぞれの位の数の後に位の名称を言う（「位の数+位名称」）。ただし、一の位は、位名称をつけないで単に数を言う。
5. 数が0の位は、数も位名称も言わない。
6. 区切りの中の位の数がすべて0なら、区切りの位名称も言わない。
7. 「千」「百」「十」の前の数が1の場合、ふつうは単に《せん》《ひゃく》《じゅう》と言う。
8. 「百ひゃく」は、前接要素により《びゃく》《びゃく》と形が変化することがある。

数字での表記に関わる、もっとも重要な点が、項目1. である。英語など印欧語では、区切りの位名称として3桁ごとの名称が用いられる場合が多い。例えば、英語を例にとると、下から順に“thousand, million, billion, trillion, ……”となっている。そのため、数字での表記では、ふつう3桁ごとにカンマがつけられるのである。しかし、日本語として読む上においては、漢語数詞系列では、区切りの位名称は4桁区切りでついているので、4桁ごとにカンマがある方が便利である。学校教育でも、英語を学習するまで（つまり、小学校で）は、次に示すように4桁区切りで表記する方が望ましい。

123,456,789,012（通常の3桁区切りの表記）

1234,5678,9012（4桁区切りでカンマをつけたもの）

せんひゃくさんじゅうよんおくごせんろっぴゃくななじゅうはちまんきゅうせんじゅうに  
この例の中央の4桁をとりあげれば、次のような構造になっている。

{(ご+せん) + (ろっ+ひゃく) + (なな+じゅう) + はち} + まん

千位数 位名称 百位数 位名称 十位数 位名称 一位数 一つ目の区切りの位名称  
ところで、上の例の中で、下4桁での百の位の数が0である。そのとき、「9012」は《きゅうせんじゅうに》と、百の位の数およびその位名称を言わない。もし、4桁区切りの中の4つの位の数がすべて0なら、その区切りの位名称も言わない。たとえば「1234,0000,0000」（通常の表記では「123,400,000,000」）は、《せんひゃくさんじゅうよんおく》であって、「万まん」はない。これを指しているのが項目5. と項目6. である。ただし、そろばんの読み上げ算など、間違い

を避けたいときには、数が0の位について「とんで」と言うことがある。「1004」を《せんとんでとんでよん》などと言う。また、下の位の数が0なら、「1000」を《せんちよーど》のように、「ちよーど」などの表現をつけて言うこともある。<sup>(20)</sup>

項目7. は、例えば、《せんひゃくじゅーえん》すなわち「千百十円/1,110円」は、千の位も百の位も十の位も、数が1であることを意味する、ということである。4. の「位の数+位の名称」という語形成規則の例外である。ただし、必要があれば数1でも位の数を言うことはできる。特殊な場合、例えばラジオの株式市況などでは、《いっせんいっぴゃくえん》というように言うことがある。これら「十」「百」「千」という位は、項目3. にあるように、4桁区切りの中の位名称である。「万」「億」「兆」などは、これらと違って、項目1. にあるように4桁区切りごとの位名称なので、具体的な数として使うときには、数が1でも必ず《いちまん》《いちおく》のように言う。

また、項目8. は、ハ行音で始まる形式が数詞の後に続くとき、ハ行音がバ行音またはパ行音に変わるとい現象である。この変化は、数詞の後にいわゆる助数詞が続く場合も含めて、ある程度規則的なので、後に説明する。

## 1.2 和語系列

一方、もともと日本語にあった和語の数詞の系列は、次のようなものである。

### 【和語数詞の第一系列】

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ひ	ふ	み	よ	いつ	む	なな	や	ここ	と一

しかし、この数詞を単独で使うことは、相撲や日本舞踊などの伝統文化・芸能の世界を除けば、もはやほとんどない、と言ってよい。

さらに、大きな数をあらわすものとしては、次のようなものがある。

はた (20) もも (100) ほ《お》(100) ち (1,000) よろず (10,000)

《ち》《よろず》は、厳密な数というより「数が大きい」という意味で用いられたものであったと言われる。「二十はた」については、「二十歳はたち」「二十日はつか」「十重二十重とえはたえ」という語形が現在も使用されるが、それ以外は「百恵ももえ」「五百里いおり」「千畝ちうね」のような固有名詞や「八百屋やおや」「千万/千萬ちよろず」「万屋/萬屋よろずや」などが見られるくらいで、ほとんど使用されない。

また、この他に「三十路みそじ」「四十路よそじ」「晦日(もともとは三十日)みそか」のような形態もある。

これらとは別に、和語の数詞に「つ」のついた形がある。形態的には「つ」を助数詞とみなすこともできるけれども、その使用範囲は広く、抽象的なものについては、他の助数詞はほとんど

使えないこともあり、「つ」のついた形全体で、和語の数詞とみなしておくことにする。「和語数詞の第二系列」と呼ぶことにしたい。それに対し、上記の系列は「和語数詞の第一系列」ということになる。

芸人が十人以上の客を呼べるようになる（＝つまり、一人前になる）ことを指す「つばなれ」ということばがある。事実、次に示すように「つ」がつくのは数が9までで、10は、《とー》のままである。

【和語数詞の第二系列】

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ひとつ	ふたつ	みっつ	よっつ	いつつ	むっつ	ななつ	やっつ	ここのつ	とー
		みつ	よつ		むつ		やつ		

下の列に併記した促音のはいらぬ形態は、もとの古い形が残っている語の中に限定される。「三つ編み、三つ折り、三つ子、三つどもえ、三つ葉、三つ又、三つ目、三つ指」「四つ足、四つ角、四つ切り、四つ相撲、四つ辻、四つ葉、四つ身」「六つ子、暮れ六つ」「おやつ、八つ当たり、八つ頭、八つ切り、八つ裂き、八つ手、八つ橋」などである。

1.3 外来語系列

このほか、外来語として、英語由来の数詞もかなり使われるようになってきた。喫茶店などで、「ワンホット」（ホットコーヒーひとつ）というような使い方もよく耳にする。

【外来語（英語由来）数詞系列】

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
わん	つー	すりー	ふぉー	ふぁいぶ	しっくす	せぶん	えいと	ないん	てん
			ふぉあ						

このうち、「フォア」は、「フォアボール」、ボートの「（舵無し／舵付き）フォア」の場合に使われる形態である。

「ワンアンダー」「ワンヒットワンエラー」「ワンゴールツーアシスト」「ツートップ」「スリーストローク」「スリーベースヒット」「ファイブファウル」「ナンバーエイト」など、スポーツ関係では英語数詞を含む語が数多く使われている。また、これらの他に「ワンマンカー」「ワンボックスカー」「ワンサイド」「ワンカップ」「ワンペア」「ツーバック」「ツートンカラー」「スリーカード」「セブンスター」「テンポイント」などの例にも見られるように、たいていの場合、外来語の数詞は外来語の名詞や助数詞の前で用いられる。

しかし、「ベストテン」「ワーストスリー」のような例や、喫茶店の従業員などが、「ホットワ

ン」(ホットコーヒーひとつ)「焼肉定(食)ワン」というように、名詞の後に数詞を単独で言う例もある。また、「セブンイレブン」のような数詞(の組み合わせ)のみの固有名詞や、「ナイン(1チームの成員、野球の場合)」「イレブン(同、サッカー)」「フィフティーン(同、ラグビー)」、ボートの「フォア(漕ぎ手四人)」「エイト(同八人)」のように、数詞語形のまま、普通名詞として使うものもある。1/2を意味する「ハーフ」、1/4を意味する「クォーター」も、外来語としての使い方は普通名詞である。

英語以外の言語に由来するものとしては、現代中国語由来の1《いー》、2《りゃん》、3《さん》、4《すー》、5《うー》、6《りゅー》、7《ちー》、8《ぱー》、9《ちゅー》が、麻雀でよく使われる。それ以外では、フランス語由来の「トリコロール(カラー)」ぐらいであろうか。ただ、この場合は、本来は「トリ」が「三」「コロール」が「色」に相当するけれども、実際には「トリ」に数量3の意味を意識しておらず、フランス国旗を指す、または「トリコロールカラー」という語形で、それに使われる赤・白・青の三色の取り合わせを指す、普通名詞として用いていることが多いようである。

#### 1. 4 ふつうに使う数詞の形態

さて、上記のように、由来からすると日本語には三種類の系列の数詞が存在していることになる。しかし、実際の使われ方を観察すると、1から10については、次に示すような形態が一般的によく使われる。

##### 【一般的な数詞形態の第一系列】(主として漢語数詞系列)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
いち	に	さん	よん	ご	ろく	なな	はち	きゅう	じゅう
			し			しち		く	

##### 【一般的な数詞形態の第二系列】(=和語数詞の第二系列)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
ひとつ	ふたつ	みっつ	よっつ	いつつ	むっつ	ななつ	やっつ	このつ	とー

上段に示したのは漢語数詞系列中心の語形である。ただし、漢語数詞本来の形と異なる部分がある。漢語なら、4は《し》、7は《しち》であるけれども、実際にはここに示したように和語数詞の語形に基づく《よん》、《なな》が優勢になっている。漢語数詞の語形では、《いち》と《しち》、《に》と《し》などを聞き間違えやすいという事情が、そのような変化の背景にある。ラジオの株式市況や気象情報の気圧など、数値が情報として重要な場合には、《よん》《なな》のほか、2を《ふた》と言うという工夫がなされている。1音節の語、無声子音で始まる語形をなるべく避けているのである。また、9は《く》と発音することもあるが、これも同様の理由からか、《きゅう》(漢音だとされている)の方が優勢である。

また、数の小さい方からの数唱（数の名称を順に唱えること）では1音節の《に》《ご》がふつうだが、後で述べるカウントダウンや、「231452」のような数の羅列を読むときには、《にーさんいちよんごーにー》のように、《にー》《ごー》と長音化させてなるべく2拍にそろえるのがふつうである。

下段に示したのは、前述した和語数詞第二系列、つまり「つ」のついた形そのままである。こちらの系列もかなり使われる。数をたずねる疑問詞が「いくつ」と「つ」のつく形態で、しかも9歳までの年齢をあらわすのに、この「つ」のつく形がよく使われるため、幼児の言語習得でもこの系列がかなり早くみられる。「○○ちゃん、いくつ?」「ふたつ。」といった会話はよく耳にする。また、抽象的なことがらを数え上げるような場合には、この系列がよく使われる。「ひとつ思いついたことがある。」「みっつほど難点がある。」など。

11以上については、下の系列は使わず、基本的に上の第一系列の語形を使う。その数の中に含まれる4、7、9の形態についても、やはり、《し》《しち》《く》より、《よん》《なな》《きゅー》の方が優勢である。

たとえば、20《にじゅー》30《さんじゅー》40《よんじゅー》50《ごじゅー》60《ろくじゅー》70《ななじゅー》80《はちじゅー》90《きゅーじゅー》が標準的である。このうち40については《しじゅー》、70については《しちじゅー》もありうる。ただし、《\*くじゅー》と言うことは、「九十九里浜」《くじゅーくりはま》のような固有名詞を除けば、ほとんどない。また、百以上の位については、《し》《しち》《く》を使うことは、「四万六千日」《しまんろくせんにち》が思い浮かぶぐらいで、きわめてまれである。11以上の数の一の位は、54《ごじゅーよん》17《じゅーなな》89《はちじゅーきゅー》など、やはり《よん》《なな》《きゅー》の方がふつうであるが、《ごじゅーし》《じゅーしち》《はちじゅーく》もありうる。

一般的に言えば、《し》《しち》《く》という形態は、上の位ほど使いにくい。そのため、たとえば2ケタの数では、十の位で《し》《しち》を使ったら、一の位も《し》《しち》《く》を使う場合が多いようである。たとえば、47について《よんじゅーなな》《よんじゅーしち》《しじゅーしち》はありうるが、《しじゅーなな》は許容度が低く、79について《ななじゅーきゅー》《ななじゅーく》《しちじゅーく》はありうるが、《しちじゅーきゅー》は、許容度が低い。

また、助数詞によって、読み方に制限や傾向が見られるものがある。ここでは、助数詞の記述が直接の目的ではないので、詳述はしないが、例えば時間表現の一部には数量9について一定の傾向があり、とりたてて扱わねばならない。具体的に例を示せば、「9字」は《きゅーじ》がふつうで、数が十以上でも同様に「39字」なら《さんじゅーきゅーじ》となるけれども、同じ音声形態の助数詞でも「9時」は《くじ》であり、「19時」はふつう《じゅーくじ》である。<sup>240</sup>

なお、数量4、7については、和語助数詞では和語系列で《よ》、《なな》になる。「粒つぶ」「束たば」なら、《よつぶ》《よたば》、《ななつぶ》《ななたば》となる。さらに、和語助数詞でなくとも、数量4で、《よ》という形式が特定の助数詞の前に現れることがある。「四人よにん」「四年よねん」「四時間よじかん」「四円よえん」「四段よだん」などである。

## 1. 5 ダース、グロス

「ダース」は、数量12でひとまとまりとする数え方である。「グロス」は、そのダースが12集まった数量である。これらは、具体物に使われることがふつうであるが、特にその対象を限定しないので、助数詞とは考えない。むしろ、原理的には、12進法の位の名称と考えた方がよい。

ただし、これらを使ったときは、ふつうその後ろに助数詞をつけないので、分布の上からは助数詞相当である。

## 2. 特殊な場合

カウントダウンのように、数の唱え方が異なる場合や、自然数以外の場合について、ひとわり整理しておく。

### 2. 1 カウントダウンと「0」

次に、数を「数え下げる」場合についてふれておく。ロケットの発射前の秒読みのようにカウントダウンするときの数の形態である。

#### 【カウントダウンの数詞語形】

10      9      8      7      6      5      4      3      2      1      0  
じゅー きゅー はち なな ろく ごー よん さん にー いち ぜろ

筆者の観察では、ほぼ十人中十人が、このように発音しているようである。9を《く》、7を《しち》、4を《し》という変異もほとんどみられない。5と2は、《にー》《ごー》と長音化させて2音節で揃えるのがふつうである。また、カウントダウンという数唱のしかたそのものが、アメリカあたりから入ってきたせいなのか、0は必ずと言ってよいほど《ぜろ》である。

0は、漢語数詞なら「零れい」である。「0点」は《れいてん／れーてん》というように発音する。けれども、敗戦前から「零式戦闘機」を「ゼロ戦」といいならわしていた例もあるように、外来語の《ぜろ》もよく使われる。

0については、和語数詞には、これに相当するものがない。「ない」「なし」「ありません」などと言うしかない。0は、数学的には重要な概念であって、0と示されればそれが存在することになるが、日常の日本語では、「0が存在する」という言語表現の型よりは、「何も存在しない」という言語表現の型を使うのがふつうである。「いくつありますか。」という質問に対しては、(英語の“*There is no ~.*”のような発想で)「零あります。」とか「ゼロあります。」とか答えることはなく、否定的に「ありません。」とか「ひとつもありません。」というように答えるのである。

なお、数字が並んでいても、桁が位をあらわしていない、たとえば電話番号や部屋番号などでは、数の名称をそのまま続けて言うことが多い。このとき、0は《れい／れー》《ぜろ》または



《まる》と読まれることがある。「104」を《いちれーよん》、「0123」を《ぜろいちにーさん》、「402号」を《よんまるにごー》など。英語のように0を《おー》という（「007」を「ダブルオーセブン」など）ことはない。特殊なものでは、「110番」の《ひゃくとーばん》がある。

## 2. 2 小数・分数・平方根

小数点は、ふつう、《てん》と言うので、1以下の小数、たとえば「0.5」は、《れいてんご／れーてんご》と言う。小数点以下は、数の羅列と同様に、「1.3768」なら《いちてんさんななろくはち》のように、数の名称を並べていく。何らかの単位を使う場合、その単位によっては、小数点のところにその単位名称を使うこともある。「5.26秒」は、《ごーてんにーろくびょー》でもよいが、《ごびょーにーろく》とも言う。ただし、この「秒」については、ときに、100分の1秒という意識からか、《ごびょーにじゅーろく》と言う人もある。また、「1.53m」を《いちめーとろくじゅーさん》のように言う場合もあるが、これは後の「センチメートル」が省略されたものと見るべきであろう。

なお、小数点以下の数がある場合に、整数部分の一の位の2と5は、《にーてんさん》《じゅーごーてんはちにー》というように、《にー》《ごー》と長音化する傾向がある。

数1の半分は、0.5であるが、「つ」のついた形や助数詞・単位を使うときには、「半はん」という語形を使うことがある。「饅頭を二個半食べた。」「一歳半」「ひとつ半」「三時半」「三メートル半」「四畳半」などと使う。一部の助数詞については、「半個はんこ」「半年はんとし」「半日はんにち」のような語形も可能である。助数詞ではないが、「半ダース」とも言う。「半分はんぶん」という語形もあるが、これは（ひとつ、ふたつと数えられる）離散量にしか使えないので、「\*一歳と半分」とか「\*三時と半分」とか言うことはできない。また単独で「饅頭を（一個の）半分食べた。」のように使える。全体の数量が1以上なら、必ず「と」を使って、「二個と半分」のように言う。

分数は、分母の数を先に言い、「ぶんの」を間に入れて分子の数を言う。分母が1でも同様である。《じゅーさんぶんのなな》《さんぶんのご》など。帯分数は、かつては整数部分の数に「か」をつけて、《にかさんぶんのいち》のように言ったが、現在の学校教育では「と」をつけて《にとさんぶんのいち》のように言うことになっている。

平方根などの根は、「ルート」を頭につけて、《るーとさん》のように言う。「 $\sqrt[3]{27}$ 」は《さんるーとにじゅーなな》である。べき乗は、数の後に「の」を介して、べき数を「2乗、3乗、……」と言う。《ごのにじょー》、《にのななじょー》など。なお、「2乗」については、《じょー》（自乗）と言うことがある。

## 2. 3 倍数

ある数が、ある数にどれだけ乗じた数に当たるかを示すには、「倍ばい」という形を使う。《きゅーばい》《にのななてんさんばい》《ろくのにぶんのさんばい》など。ただし、2を乗じた

数に当たる場合については、単に「倍ばい」とも、「二倍にばい」とも、あるいは、時に「一倍いちばい」（「人一倍働く。」）とも言う。つまり、「倍」＝「一倍」＝「二倍」なのである。

## 2. 4 小さな数・割合

数1以下について、10分の1に「割りり」100分の1に「分ぶ」1000分の1に「厘りん」、さらにまれに、10000分の1の「毛もう」100000分の1の「糸／絲し」という位名称が使われることがある。利息の利率・歩合、野球の打率、スポーツの勝率などに使う。

## 3. 形態の変異

数量4の場合の《し》と《よん》のような、系列の間のゆれや、《にー》《ごー》のような長音化の例については、ここまで述べてきたとおりである。この他に、特定の音環境による音の変化があるので、それについて整理する。

形態の変異については、本稿でとりあげなかったアクセントを含めて、日本放送協会編（1966）『日本語発音アクセント辞典』に詳しい記述があり、その内容は、日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』にも転載されている。<sup>註(6)</sup> また、東中川・東雲（1996）に、簡潔で要を得た整理がある。<sup>註(6)</sup> それらを参考に述べることにする。

### 3. 1 後項要素の変異

#### 3. 1. 1 濁音化（連濁）

複合語の語形形成における連濁現象は、ふつうは、複合語の後項要素が和語であって、もともと濁音を含まない、という条件下でおこるが、数詞が前項要素の場合には、後項要素が漢語であって、前項要素が数詞「3さん」（数詞以外では「何なん」）の場合に限定される。しかも、さほど濁音化する例は多くない。

ハ行音については3. 3で別に扱うことにして、それ以外のカ行音、サ行音の例をあげると、「三階」《さんがい》「三軒」《さんげん》「三足」《さんぞく》などがある。

「三回」「三勝」「三点」などは連濁しないし、かつては連濁がふつうだったと思われる「三寸」「三艘」「三層」も、<sup>註(7)</sup>《さんすん》《さんそー》《さんそー》で違和感がない（さすがに慣用句の「舌先三寸」は《したさきさんずん》だが）。「三階」「三軒」「三足」でさえ、《さんかい》《さんけん》《さんそく》という発音がかなり聞かれるようになった。これらの連濁は消えつつあるのではないか。なお、和語助数詞の場合は、例えば「一しな（品）」「一たま（玉）」だと、《みしな》《さんしな》、《みたま》《さんたま》のように、前項要素の数詞が和語でも漢語でも連濁しないようである。

#### 3. 1. 2 ハ行音の変化

後項要素の最初の音節がハ行音の時、バ行音ないしパ行音に変化することがある。これにはかなり規則性がある。この音変化には、前項要素である数詞の音変化（促音化）が関係しているの

で、3.3でまとめて整理する。

### 3.2 前項要素(=数詞形態)の変異——促音化<sup>註(9)</sup>

後項要素が無声子音で始まる場合、前項要素である数詞の「1いち」「6ろく」「8はち」「10じゅう」の末尾が促音になることがある。<sup>註(9)</sup>このうち、「10じゅう」については、《じっ》または《じゅっ》という形のゆれがある。<sup>註(10)</sup>

「1いち、10じゅう」は、どの無声子音の前でも原則的に、「6ろく」はカ行とハ行では原則的に、促音化する。「8はち」はどの無声子音の前でもおおむね、促音化する。「おおむね」としたのは、「8頭」《はちと一》「8進法」《はちしんぽ一》「8巻」《はちかん》「8本」《はちほん》のように、促音化しない形態もかなり聞かれるからである。

音環境による違いについては以下で整理するが、先に数詞に位名称が続く場合をとりあげておく。位名称の前での数詞の促音化には、「六百ろっぴゃく」「八千はっせん」「一兆いっちょう」のような例がある。「百」では「6ろく」「8はち」が、「千」では「8はち」が前接するとき促音化する。なお、「百」「千」の前に「10じゅう」が来ることはないし、ふつうは「1いち」が来ることもない。ただし、必要があれば《いっぴゃく》《いっせん》と言うことはある。「兆」は、「1・8・10」が前接するとき促音化し、「京けい」では、「1・6・8・10」が前接するとき促音化する。

#### 3.2.1 後項要素がサ行音・タ行音で始まる場合

数詞「1・8・10」が前接するとき、促音化する。位名称の「千せん」「兆ちょう」の他、助数詞・単位の例としては、サ行では「一さい(歳)、一しゅう(周)、一しょく(色)、一しんほう(進法)、一すん(寸)、一せき(隻)、一せき(席)、一せん(銭)、一そう(艘)、一そく(足)」、タ行では「一たい(体)、一ちゃく(着)、一つう(通)、一てき(滴)、一てん(点)、一とう(頭)」などがある。

#### 3.2.2 後項要素がカ行音で始まる場合

数詞「1・6・8・10」が前接するとき、促音化する。位名称の「京けい」の他、助数詞・単位の例としては、「一かい(階)、一かい(回)、一かく(画)、一かん(貫)、一かん(巻)、一き(機)、一く(句)、一く(区)、一くかく(区画)、一けん(軒)、一けん(件)、一こ(個)、一こ(戸)」などがある。

#### 3.2.3 後項要素がハ行音で始まる場合

数詞「1・6・8・10」が前接するとき、促音化する。位名称の「百ひゃく」の他、助数詞・単位の例としては、「一は(派)、一はい(杯)、一はく(泊)、一はく(拍)、一はつ(発)、一はん(版)、一ひき(匹)、一ひょう(俵)、一ひょう(票)、一ふん(分)、一へん(編)、一は(歩)、一ほん(本)」などがある。

### 3.3 後項要素がハ行音で始まる場合の音変化

後項要素がハ行音で始まる場合は、3. 2. 3で見た前項要素末尾の促音化とともに、後項要素にも音変化が見られる。

数詞「1・6・8・10」が前接して促音化している場合は、後項要素の頭のハ行音はバ行音になる。ただし、促音化していなければ、ハ行音のままである。そこで、「八杯」は、《はっぱい》または《はちはい》となる。

数詞「3さん」や、「何なん」が前接するときには、後項要素の頭のハ行音は、原則としてバ行音またはバ行音になる。上記の例では、前者に相当するのが、位名称の「百」や「杯、匹、俵、票、本」、後者に相当するのが「派、泊、拍、発、版、分、編、歩」である。ただし、前者のうち「俵、票」や、後者のうち「歩」については、バ行バ行のゆれがありそうである。

また、数詞「4よん」が前接するとき、数詞「3」が前接するときバ行音になるもの（つまり後者の例としてあげたもの）は、後項要素の頭のハ行音がバ行音になることがある。助数詞によっては必ずというわけではないので、例えば「4分」は《よんぶん》だが、「四泊」は《よんぱく》または《よんはく》である。「俵、票」は数詞「3」でもゆれがあるうえ、「四俵」「四票」でも、《よんびょー》または《よんひょー》というゆれがあるように思われる。

なお、「一わ（羽）」は特殊で、数詞「10じゅう」が前接するときのみ促音化することがあり、そのとき後接要素である助数詞の頭のハ行音がバ行音となって《じゅっぱ》または《じっぱ》となる（促音化しなければ《じゅーわ》）が、「1・6・8」ではふつう促音化しない。また、数詞「3さん」や「何なん」が前接するときには、後項要素の頭のハ行音は《さんば》《なんば》と、バ行音になることがある。

### 3. 4 後項要素が和語の助数詞の場合

和語助数詞でも、例えば「一つぶ」や「一はこ（箱）」や「一ふくろ（袋）」なら「八粒」《はっつぶ》や「六箱」《ろっぱこ》や「十袋」《じゅっぶくろ》ないし《じっぶくろ》のように、同じ形態規則で促音化することがある。しかし、数量1では数詞は必ず和語「1ひと」を使うため、《ひとつぶ》《ひとはこ》《ひとふくろ》のようになるので、上記の漢語助数詞と同列には扱えない。また、数量3・6・8・10では、数詞自体漢語の「3さん・6ろく・8はち・10じゅう」と和語の「3み・6む・8や・10と（お）」のゆれがある。

また、動作をあらわす例では、《ひとつぱしり》《ひとつぶろ（あびる）》のように、和語数詞「1ひと」でも促音化（し、同時に後接する助数詞のハ行音がバ行音に変化）する場合がある。ただし、これらは数量1の用法だけである。

### 3. 5 後項要素が外来語の助数詞・単位の場合

外来語の助数詞・単位では、やや傾向が異なる。「1いち」「6ろく」「8はち」は促音化しないことが多い。ただし、「10じゅう」については、原則として促音化する。《じゅっふるん》《にじゅっかーとん》などとなる。その他には、「一カロリー、一シート、一シリング、一ハロン、一

フィート」など。

一方で、外来語の助数詞の中には、下記のようにかなり促音化するものもある。これらの場合は、「10じゅう」は原則的に促音化し、「1いち」「6ろく」「8はち」について、促音化するかしらないかは、個別の助数詞によって異なる。筆者の判定によれば、およそ次のようになる。

【外来語助数詞・単位の促音化】<sup>註(1)</sup>

	1	6	8	10
例：-カン（缶）	?	時としてする	時としてする	する
-キロ	しない	する	時としてする	する
-	時としてする	する	時としてする	する
-センチ（cm）	する	しない	する	する
-セント	する	しない	する	する
-チーム	たいていする	しない	たいていする	する

なお、外来語の助数詞・単位のなかで、形態的に和語や漢語に見られないのは、語頭がパ行音のものである。この場合は、「10じゅう」は原則的に、「1いち」「6ろく」「8はち」は時として、促音化する。例としては、「-バック、-ピン、-プラン、-ページ、-ペソ、-ペンス、-ポンド」などがある。

また、《じゅっふるん》の例のように、促音化していて、後項要素の頭がハ行音であってもパ行音にはならない。「3さん」「4よん」の後でも濁音化しない。つまり、外来語の助数詞・単位は、どんな場合でも形態を変化させないで維持するのが原則である。（1998.1.13.）

注

- (1) このように音声形態のはっきりしない場合が、ままあるので、小学校までの教科書や、初級ないし中級までの日本語教科書は、総ルビにすべきである。
- (2) 数詞の形態、助数詞の形態、アクセントについては日本放送協会（NHK）編（1966）『日本語発音アクセント辞典』（日本放送出版協会）の、「解説」中の「数詞、助数詞の発音とアクセント」（桜井茂治・秋永一枝）が詳しい。また、数詞・助数詞の全体像については、玉村文郎（1986）「数詞・助数詞をめぐって」（『日本語学』5-8）が、助数詞については、森岡健二他編（1993）『集英社国語辞典』（集英社）の「付録」にある「助数詞一覧」や、梅棹忠夫他監修（1995）『日本語大辞典 第二版』（講談社）の「特集」にある「ことばの資料便覧」中の「教え方と助数詞」が、かなり詳しい。
- (3) 「千円ポッキリ」「ジャスト2000」なども類似の例。
- (4) 日常の使用頻度が高く、しかも形態的に注意が必要な助数詞が使われる代表的な語群としては、時間表現、特に日付（「ついたち」「よっか」「じゅうよっか」「はつか」「おおみそか」など）や、人数（「ひとり、ふたり、さんにん、……」）などがある。
- (5) 前掲『日本語発音アクセント辞典』および、日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典』（大修館書店）の第1章の「資料」。数詞の形態の一部については、30年を経て、若干変化しているように思われる。

- (6) 東中川かほる・東雲裕子(1996)『独りで学べる日本語文法』インターンシップ・プログラムス(発売元:凡人社)の、「数詞」の項。日本語学習者にわかりやすく整理されている。
- (7) 前掲『日本語発音アクセント辞典』では、それぞれ《さんずん》《さんぞー》《さんぞー》となっている。
- (8) 「1いち」が促音化する例は多くあるが、「一睡(もせず)」「一炊(の夢)」「一宿一飯(の恩義)」「一掬(の涙)」などは、ほとんど数量1に限定されるので、以下にあげる例からは除いた。
- (9) 音声としては「1いち」「8はち」と後部が共通しているはずの「7しち」は、促音化しない。「いち」「はち」の「ち」が入声音であったのに対し、「しち」の「ち」は入声音でなかった、という事情によるものと思われる。現代語では「7なな」という和語の形態が多く用いられ「しち」はさほど使われないということもある。
- (10) 最近の学校教育では、《じゅっ(ぼん)》より《じっ(ぼん)》の方を標準的な形態としているようであるが、実際には《じゅっぼん》の方がよく使われているのではないか。
- (11) この表の一部については、例えば「1いち」「8はち」のチと「一チーム」のチが、「6ろく」のクと「一クラス」のクが同音で無声子音であって、間の母音が無声化しやすいことから、促音化しやすい、という説明もできそうである。

なお、この「一チーム」「一クラス」や「一カン(缶)」は和語でなく外来語の助数詞であるにも関わらず、数量1・2では《ひとち-む》《ふたち-む》、《ひとくらす》《ふたくらす》、《ひとかん》《ふたかん》のように、和語数詞「1ひと」「2ふた」を使って言うことがある。特に「一カン(缶)」では、《いちかん》または《いっかん》とか、《にかん》とか言う方がむしろまれであろう。その意味で、これらは和語化しているとみなすこともできよう。

また、「一キロ」について、本学部国際文化学科の日木満助教授から、ある学生が内省として「キロメートルの意味では《いっきろ》と言わないが、キログラムの意味でなら《いっきろ》と言う」と述べたという情報を教えていただいた。日常に定着している度合いの差が、形態に反映していると考えられるべきかもしれない。